

学級世論をつくる

生徒指導には二つあるとよく言われます。

一つは、先手の生徒指導。

今ひとつは、後手の生徒指導。

先手の生徒指導が、予防を目指し児童への間接的な指導になっているのに対して、後手の指導は問題が起きてから、その当該児童に対しての直接指導となります。

そして、多くの教師は先手の生徒指導を行いたいと思っているはずですが。

しかし、予防指導とはいったいなにをどうすればいいことなのでしょう？

私は、このことを学級世論をつくといい換えることにしています。

学級の世論を正しい方向へ導くということです。

これが、イコール「先手の生徒指導」なのです。

具体的には次のようなことが考えられます。

女の子同士のこそこそ話が問題になる前に、全然関係ないときに、ジョークめかして、授業中雑談のように……

ねえねえ、みんな、二人くらいの人がさ、なんかこそこそ話してさ。こっち見てねえ、なんかにやにや笑ってるの。ああいうのイヤじゃない！？（「やだあ！」と子どもたちが言えばしめたもの）
先生の中学校1年生の時のクラス、そういうクラスだったんだよね。（「ええ！」なんて子どもたちが言う）ああ、みんなもイヤなんだ。よかった。先生も大っきらい。ちゃんもイヤだよね。

こんな風に話すのです。

最後の ちゃんのところは、だれを当てるかわかりますね？

やりそうな子を、あてて、味方に付けておくんです。

ついでに、『誰かやってたら ちゃん、注意してね。それでもきかなかったら、先生呼んでね』なんて言っておきます。

これで、本人は絶対出来ません。（笑）

こうして、子どもたちを巻き込みながら、話をして学級世論をつくっていきます。

すると、おそらく問題は半分くらい予防されると思います。

それでも、問題は起こるのです。

意地悪だってあるのです。

そうしておきた問題はやはり直接に指導しなければいけません。

しかし、その時も学級世論を意識しなければいけません。

例えば、何かわるいことをした子どもがいたときに、ある程度のことはすべての子どもたちの前で指導するのです。

そして、次のような言葉でまわりの子を巻き込むのです。

先生は、くんがとてもわるいことをしたと思いますが、ほかのみなさんはどうですか？ くんが正しいと思う人は手を挙げなさい。誰もいませんね。

こうして、正しいことは尊重され、間違っただけは必ず暴かれ責めを負うのだと言うことを教えるのです。そして、最後に『くん、いいとこいっぱいあるのにね。もったいないね。今回はちょっと間違っちゃったんだよね』と優しくフォローしてあげます。

私達がそうであるように、多くの間違いの中から子どもは育つのでしょうか。

「興味・関心にそって」という美辞にだまされてはいけない

「現代社会における学校への呪縛」。

これ私の卒論テーマです。

テーマを決めるまでに、たしか30冊くらい学校論の本を読みました。

テーマを決めるだけで2ヶ月くらいかかったおぼえがあります。

腐っても大学生。大学生が考えても、研究のテーマなんていうのは時間がかかるのです。

「総合的な学習の時間」でよく子どもたちに追究のテーマを決めさせるという活動があります。

ある総合の研究授業を見に行ったら、先生が初発の発問で『なんか調べたいことないか？』ってきいていて、あきれのを通り越して、笑っちゃいました。

「そんなこと急に言われても……」という気持ちでしょう、子どもたちは。

テーマなんていうのは、周到的な布石があって、きちんと指導した上でようやく決められるものです。

大村はま氏の著書に『教えるということ』（共文社）という名著があります。

そこで、「仏様の指」というお話をしています。大村氏の好きなたとえ話だそうです、奥田正造先生という方から聞いた話だそうです。

(以下引用)

「仏様がある時、道ばたに立っていらっしゃると、一人の男が荷物をいっぱい積んだ車を引いて通りかかった。そこはたいへんなぬかるみであった。車は、そのぬかるみにはまってしまって、男は懸命に引くけれども、車は動こうともしない。男は汗びっしょりになって苦しんでいる。いつまでたっても、どうしても車は抜けない。その時、仏様は、しばらく男のようすを見ていらっしゃいましたが、ちょっと指でその車におふれになった。その瞬間、車はすっとぬかるみから抜けて、からからと男は引いて行ってしまった。」という話です。「こういうのがほんとうの一級の教師なんだ。男はみ仏の指の力にあずかったことを永遠に知らない。自分が努力して、ついに引き得たという自信と喜びとで、その車を引いていったのだ。」こういうふうにおっしゃいました。そして、「生徒に慕われているということは、たいへん結構なことだ。しかし、

まあいいところ、二流か三流だな。」と言って、私の顔を見て、にっこりなさいました。

(引用終わり)

味わい深い話でしょう。

スポーツ界二つの記事

角界から。

(引用開始)

相撲部屋での常識も今は昔とか。十八人の弟子を育てる高田川親方(元大関前の山)によると、「おはよう」「ありがとう」というあいさつすら、しっかりできない弟子が増えてきた。「できない子は、しかりとばしている」と悩みは深い。九人の弟子を抱える押尾川親方(元大関大麒麟)は「トイレ掃除に何の道具を使えばいいか、わからない者が多い。とりわけ、学生出身の力士がね」と頭を抱える。

「所作の乱れが目につく。基本を徹底させたい」という北の湖理事長(元横綱北の湖)の号令のもと、今年の秋場所前には全関取を対象に塵浄水(ちりじょうず)を切る所作など力士としての基本動作を再認識させる講習会を開いた。マナー、常識の欠如の深刻さを物語る。

角界のイロハは新弟子のとき、相撲教習所で習う。習字やけいこの基本となるしこ、てっぼうのほか、土俵上での所作についても指導を受ける。あとは、相撲部屋での厳しい上下関係のなかで、しつけられた。げんこつひとつで弟弟子は兄弟子の言うことをきかなければならなかった。

ところが、相撲部屋でのしつけは希薄になりつつある。げんこつされると、その力士の親が烈火のごとく部屋に怒鳴りこんでくることも。ある親方は「兄弟子が弟弟子の面倒見ができなくなっている」と打ち明ける。少子化による影響も受けていよう。初代貴ノ花(現二子山親方)が寝坊し朝げいこにきていないことを知った兄(元横綱初代若乃花)は、寝床に行って弟を竹刀で血が出るほど殴った、といわれる。かつては、こうした厳しさが当たり前だった。

時代の流れとともに、角界のしきたりは変化してきた。だが、日本の社会全体のなかで崩れかけている「礼」を、国技・相撲も失いかけているのは気にかかる。

(引用終了)(産経新聞) - 12月12日

次は球界。

(引用開始)

怪物がチビっ子に怒りの喝だ。西武・松坂大輔投手(24)が会長を務める親睦団体「55年会」が主催する野球教室が11日、西武ドームで行われた。イベントには55年会の37選手と29チーム、455人の小学生が参加したが、松坂は礼儀を欠いた行動に苦言。さらには指導者、親の教育方法にまで異議を唱えた。55年会の今後の発展プランも口にした松坂は、将来の球界を担う子供たちを思えばこそ声を大にした。

黙っていられなかった。イベント終了後、松坂は「最後は気分が悪くなっちゃいました」と胸の内をぶちまけた。原因は参加した子供たちのマナー。「あいさつはもちろん敬語も使えない、名前は呼び捨て...」。笑顔は消えて思わぬ仏頂面に。表情からは怒りと無念の思いが伝わってきた。

自身が会長を務める55年会初のファン参加イベント。成功を確信していた松坂は、参加者とのギャップ

に驚いた。「僕の時はいち中高と本当に厳しかった。“ケツバット”なんて当たり前。殴れなんて言わないけど、時代が違うのかな」。イベントの冒頭に「あいさつはしっかり。呼び捨てもやめよう」と司会者がアナウンスしたが、聞こえてくるのは「松坂！」の声。野球の技術だけでなく心も教えたい。だからこそその苦言だった。「(元阪神の)野村監督の“人間的な成長なくして技術の進歩なし”という言葉は、いつも自分に言い聞かせています」。子供たちが指導者に乱暴な口を聞くのも耳に入った。しかし監督、コーチは何も言わない。「監督やコーチ、親はもっとしつけが必要ですよ」。参加者にも高い理想を求めるのが55年会流。負けないように団体としても成熟するつもりだ。

(引用終了) スポニチ

先日、日本の子どもの学力低下が発表されました。

「ゆとり教育」への一斉攻撃が始まりそうです。

しかし、果たして問題は、学校教育にだけ矮小化されているのでしょうか？

また、思わず私の師匠、野口芳宏先生の言葉を思い出しました。

『教育には、親と敬が必要なんですよ。教師と子どもはね「親しく」はなったけれど「敬い」はなくなったね』

実に耳が痛い話です。

小学校であるからこそ、きちんとした人間関係の基礎を子どもたちに教えなければと思います。

先日、ポケットに手を入れながら話しかけてきた子どもがいて、いきなり怒っちゃいました。

そんなこと、どこかで習わなかったのでしょうか。

みんなで何とかしなくちゃ、国が滅ぶように思います。

偏差値30の高校が改革をして、国立大学合格178名、医科歯科系大学72名合格、早稲田、慶応、常置、東京理科大計335名合格の快挙を成し遂げたという話があります。

江戸川学園取手高校のことです。

校長の高橋鍵彌校長は言います。

「人格を磨けば、学力は伸びるのです。江戸取は開校以来一貫して、知識より人格を重んじ、『心の教育』に力を入れてきました。その結果、自然と生徒たちの成績も上がったのです。」(江戸取流『学力革命』) サンマーク出版)

私が前任校で生徒指導係の時やったことの一つに「苦小っ子 三原則」の制定があります。

- 自分から挨拶
- まず「はい」と返事
- 落ちているゴミを拾う

これを児童に覚えさせ、先生方には、まず先生方が率先して行うようお願いしました。

前の学校は、「挨拶にいい学校」「きれいな学校」と外の人にほめられることが多かったです。